

## 講 演

第十九卷第八號 昭和八年八月

## 滿 鮮 視 察 談

(昭和八年六月二十七日土木學會第六十一回講演會に於て)

會員 工學士 木 津 正 治

On the Recent Conditions in Manchuria and Korea.

By Seizi Kizu. C. E., Member.

## 内 容 梗 概

本文は、最近著者が旅行した滿洲及朝鮮の視察談であるが、特に北鮮に於ける要港に就て述べたものである。

私は先般、南滿洲鐵道株式會社より、北鮮に於ける羅津港の計畫につき相談したき故に、一度現地を見る様にとの依頼を受けましたので、去る4月27日横濱を出立致し、5月1日下關を出帆し、北鮮より北滿に入り、南滿を経て、5月22日に横濱に歸りました。其間、僅かに3週日餘の視察に過ぎざるのみならず、充分なる豫備知識を持たぬものが、跼足で走り廻りましたから、完全なる視察を遂げ得る筈もない譯でありまして、皆様の前で御話をするのは甚だ烏滸がましいのでありますが、眞田會長より、何でもよいから話せとの御下命でありましたので、此壇上にまかり出た次第であります。でありますから、それが果して正鵠を得て居るや否やと云ふことは別問題と致しまして、自分の頭に直覺的に寫つた事柄を其儘申上げまして、暫時皆様の御清聴をかがします。私は港灣技師でありますから、話は大陸其方面に關することゝ豫め御承知置きを願ひます。経過した土地の順次に話を進めます。

先づ、釜山に到着致しましたが、當港は随分廣い水面積を有して居りますが、未だ其一部分しか使用して居りませんので、まだまだ擴張の餘地が充分にあると思ひました。京城では總督府の廳舎の立派なのが目に着きました。次に元山港に行きましたが、此處は相當に整つた港であります。此港は永興灣の一角にあります。其永興灣と云ふのは、一寸見たところ、大變に良好な灣でありまして、出来るものなら、北滿の鐵道の終端港を此處迄持つて來ればよいと思ひました。此地で、元内務技師で新潟土木出張所に居られました、長郷技師に大變に御世話になりましたが、異郷で舊同僚に會ふのは非常に懐しいものであります。

次に、興南港に一泊して視察しましたが此港は別名、西湖津港とも申しまして、同じく舊同僚の内務技師であつた久保田豐君が最近築造せられました一大工業港であります。朝鮮窒素肥料株式會社が自分の専用港として使用して居るものであります。此會社は彼の有名なる赴戰江の水力電氣19萬キロを利用して、窒素肥料を製造して居るのであります。其規模頗る雄大でありますから、北鮮に遊ぶ者は是非參觀するを要すると存じます。會社は赴戰江の利用に成功して味を占めましたので、またまた其附近にある長津江を締切り32萬キロの電力を起して益々其事業を擴張せんと致して居ります。赴戰江でも長津江でも、西に流れて居る川を途中で締切り、之を東に流し、其處にある高落差を利用して發電致して居りますが、此方法によりますと北鮮にはまだまだ多量の水力が得られる様であります。川の流れを變更するなど云ふことは、日本内地では、沿岸の住民より苦情

が生まれて、とても行はれ相な事ではありませんが、朝鮮の現状では大した困難もなく實施し得ますので、此點が北鮮の水力にとつて非常に有利なる點であります。よくは判りませんが、遼東江の水力は 1 キロ約 200 圓位で出來上つて居る様であります。こんな安い電力は日本内地では最早無いのではないかとも思つて居ります。

此頃、朝鮮總督府では北鮮の開発に大變に力を入居りますが、これは今申し上げました水力電氣を利用すると共に、北鮮に豊富なる木材を切り出す爲に、森林鐵道を敷設し、或は又方々に散在する砂金及石炭を採掘することに努力して居らるゝのであります。

(以下には、北鮮の要港に就て述ぶるが、之には海圖 No. 309 舞水端至豆滿江、No. 310 造山灣及雄基灣、No. 315 朝鮮東岸北部諸分區第一等を参照せらるれば、了解を深めることが出來ます。)

次に、城津及清津の 2 港を見ましたが、清津港には岸壁及防波堤が殆んど竣功致しまして、何時でも 5 000 噸級の船が横着けし得る様になつて居ります。

清津で汽車を棄てまして、目的の羅津へ自動車で行きましたが、此間は距離約 110 軒でありまして、そんなに遠くはないのであります。已に相當の道路が出來上つて居り、乗合自動車も往復して居ります。羅津には數軒の宿屋が最近出來ましたが、新開地のことゝ餘り上等でもありませんので、雄基に宿を定め、其處から羅津に通つて調査致しました。雄基には仲々立派な宿屋がありまして、日本内地の清水港級或は夫以上でありますから何等の不便もありません。雄基と羅津との間は其距離僅かに 15 軒で、山一つ越せばよく、自動車でも 30 分位しか要しません。

併て、前に申し上げました様に、私の旅行の目的は全く羅津港にありましたので、此港は相當に委しく見ましたから、以下少しく羅津港に就て申し上げます。

羅津港は此度、北鮮の吞吐港に決定致しまして、滿鐵は其鐵道を此港迄延長し、之を修築して大連港の姉妹港として經營せんとするものであります。從來、此港は吉林より北鮮の會寧に出て、朝鮮鐵道に連絡する、所謂吉會線のみ終端港であるかの如く、世に傳へられて居りますが、之は少しく誤りでありまして、獨り吉會線のみならず、北滿の東部にある鐵道は何れも此港に向つて居りますから、此方面の物資は總て羅津港に出ることに成りますので、特に大規模の港を必要とする譯であります。

然らば、其規模を何程にするかと云ふことが問題であります。滿鐵では現在大連港が凡そ 1 年間 900 萬噸の物資を吞吐して居りますので、之を標準とせられまして將來の港の規模を 1 年間 900 萬噸と定め、差し向き第一期計畫と致して、1 年間 300 萬噸だけの設備を造ることに成りました。そこで、地を羅津港の北西の沿岸に相し楯型に 8 本の埠頭を出し、此内の 2 本半だけを此際築造することに成りました。埠頭は其水深を最大 10 米にして、15 000 噸までの船を横着することになるだらうと思つて居ります。其埠頭の構造などを如何にするかと云ふことが、私の相談を受けました主たる問題であります。是を話しましては、餘り細かくなり過ぎますから差し控へて置きます。

羅津港は羅津灣の奥の部分に稱するのであります。水路誌に記載してある港界によりますと、其水面積が約 20 平方軒、即ち約 600 萬坪であります。港の前面に大草島及小草島の 2 島が横はりまして、風浪を防いで居ります。此附近一帶は、偏北の風が多く其力も強いのであります。これは陸より海に向つて吹くのでありますから、港としては大して障りとならぬのであります。而して灣口が南西に向つて開いて居りますが、偏南の風は其力も弱く、回数も少ないのでありますから、灣口から入る浪は大したものではないと存じます。そこで、港口には果して防波堤を設ける必要があるや否や疑問であります。案としては築造することに一應假定してあります。

水深は最大 20 米もありますので、不足どころか寧ろ深過ぎる位であります。海底は砂及泥土でありますから、錨掛りは相當に良好の様であります。結氷は東海岸に密りまして、約 15 cm 位ある様であります。結氷と云ふことは日本内地には全く無いことでもありますから、吾々内地の技術家は何等經驗を有しませんので、之に就ては何とも言を挿むことが出来ませんが、滿鐵の技師の御話では、大連も多少氷が張るが、夫よりは羅津の方が寧ろ始末が仕易い方だと申して居られますから、大した港の障害とはならぬ様であります。要するに、羅津港は大變に良好な港でありまして、海軍の水路誌にも“羅津浦(灣)は芳津浦と大草島との間より、北東方に灣入せる一大灣にして、水深適度、能く四方の風浪を保障し、致る處に錨地を有し、朝鮮東北部沿岸に於ては天與の最好港灣たり”とありますが、全く其通りと存じます。

次に、羅津より北の僅かに 15 軒を距たり、岬角一つ廻つたところに雄基港があります。此港も亦悪くない港でありまして、已に岸壁(1000 噸級)も出来上りまして、其前面を浚渫中であります。雄基港の奥に龍水湖と云ふ湖水がありますが、之に掘り込みしますと、良好な船渠を造り得ますので、此案を提唱せられた方もあります。

偕て、清津、羅津並に雄基の 3 港は北鮮吞吐港の候補地として、從來競争の地位に立ち、是が優劣に關しては識者の間に種々議論せられたのであります。然るに、最近國家の最高機關によりまして、國策として羅津港が北鮮の吞吐港に定まりましたので、3 港比較論は之を論じましても最早詮なきことと相成りましたから、私も茲では委しくは申し上げませんが、唯一言決論を申し上げますれば、清津並に雄基も悪くはないが、羅津港も亦悪くはありません。出立の前には、羅津港は水面積は大變に廣いが、陸が直ぐ山だから、平地に乏しい缺點があると聞かされて居りましたが、實地行つて見ますと、沿岸には全く平地が無い譯ではなく、且つ又沿岸に迫つて居る山々も其勾配は餘り急ではありませんから、工夫をして使へば、相當に使ひ得る様に見受けました。又、良水に乏しい様にも聞いて居りましたが、之は同行の草間教授が其方面を調査せられまして、確たる結論は未だ御伺ひ致しませんけれども、現地での御話では大した心配を要せぬ様に申して居られました。更に又地質が非常に悪くて構造物に多額の工事費を要すると云ふ風評もありましたが、之は非常に良好だとは申し上げ兼ねますが、内地の横濱港並に神戸港などよりは良好であります。尙又、結氷に就ての心配もありますが、之は清津は最も少なく、羅津之に次ぎ、雄基は最も多いのではないかと存じましたが、何れにしても此爲に港が使用出来ないと言ふことは無い様であります。

以上で羅津港に就ての御話は終りと致しますが、羅津より北に進み、朝鮮の北端に西水羅と云ふ港があります。この處に、今現に漁港が築造せられて居りまして、約 7,8 分竣功して居ります。

北鮮の海岸一體に互りまして、最近鰻が大變に獲れ出し、殊に先年の内地の大地震以來著しく増加した由で、地震が朝鮮の海岸に鰻を追ひ込んだと云ふ、迷信の様な何だか鰻と鯰と關係でもある様な風説もありますが、兎に角、鰻が多量に獲れるのであります。獨り鰻のみならず、其他種々の漁獲物もありますので、此頃方々に漁港が築造せられて居ります。西水羅港も亦其内の一つであります。殊に本港は世界の大漁場たる 蘇領沿海洲の沖合に出漁する日本の漁船の根據地でありますので、特別に重要なものであります。

西水羅に行く途中に、晚浦、西藩浦及東藩浦と云ふ三つの湖水がありまして、随分廣大な水面積を抱擁して居りますが、之を掘つて北鮮の吞吐港に充當したらと云ふ人もあります。又豆滿江の川口が悪くて、折角川を流して來た木材を出すのに困るから豆滿江より此湖水へ運河を掘り、木材を流し込みて貯木場となし、此處に木材の大集散地を造らうと考へて居る人もあります。

次に豆滿江に行つて見ましたが、我國では此川は随分名高いので、私も行かぬ前は江口は無論悪いだらうが、江

内は相當に水深もありて、尠ならず舟運に使用せられて居るものと想像して居りました。然るに、實際行つて見ますと、舟と云つては漁船1隻も浮んで居らず、僅かに警羅用の一小發動機船がありました。これとても最近來たものだと云ふことでありまして、全く使用せられて居りません。と云ふのは、對岸は蘇領でありまして、全然交通を遮斷せられて居りますのと、一つは江内の水深も大して深くなく、漸く筏を流し得る位のものであるらしいからであります。

偕て、從來内地では北鮮は全く不耗の地で、何等取るに足らぬ所として、殆んど顧る人もない位であります。私も、どこか其處らで加藤清正が虎を刺し殺した所である位にしか思つて居りませんでした。此度行つて見ますと、未だ文化に遅れて居ると云ふ事は事實であります。其將來を考へますと誠に洋々たるものがある様であります。北滿の鐵道が瀋陽港に頭を出したと云ふこと、それだけでも、もう一大革命を持ち來すものであります。夫れと共に、北鮮自身も亦已が有する潛勢力を發揮して、夫れが水力電氣の開發となり、木材の輸出となり、砂金、石炭の採掘等となりて顯れ、所謂北鮮開發となりて、今後は今迄とは全く變つた形で、我々の前に現はれるものゝ様に認められます。でありますから、皆様に於かれまして、是非一度北鮮を御視察になる様に御駕め致します。

北鮮の事はこれ位にして置きます。北鮮より汽車で新京に行く積でありましたが、途中匪賊に襲はるゝ危険があるので、汽車はやめて飛行機で行きました。飛行機の上より見ますと、吉林の山中には相當大きな森林があります。新京は今市街の建設中で、市中は頗るどさくさして居ります。建築には煉瓦を多く使用致しますので、之を製造する工場が街を取り圍んで居ります。

次に哈爾濱に行き松花江を見ました。流石、松花江でありまして、河幅などはとても廣く、大したものであります。相當大きな puddle steamer が浮んで居りまして、之が shallow draft の lighter を曳船して貨物を運搬して居ります。本船には主として客を乗せるのだ相であります。元來松花江の水運の利く區間は、大體同江・哈爾濱間約 600 軒、次に哈爾濱・大賚間約 220 軒と、夫れに第二松花江に入りまして大賚・吉林間約 300 軒である相であります。其内でも、同江・哈爾濱間が主として利用せられて居るが、あとの 3 區間は大して使用せられて居らぬのであります。同江・哈爾濱間には 1 年間約 60 萬噸の貨物が運搬せられて居る由であります。之は少しく過少ではないかとも思ひましたが、或は統計の不完全に基づく爲かとも思ひます。此區間とても水深は大して深くなく、1.5 米か或は 1.0 米位しかない様であります。殊に、牡丹江の合流點である 三姓の上流に一大淺瀬がありて、之れが運航の大障害をなして居りますが、之を除くためと稱して先年支那人が貨物に課税して多額の金を集めたが、支那人のこゝとて、浚渫船を 1 艘を買つただけで、仕事も何もせずに殘金は總て之を着服してしまつたとのことであります。其浚渫船が現に哈爾濱の對岸に繋留してありました。松花江は現在は大して利用もされて居らぬが、將來處々に低水工事をやりて河を直せば、随分使用し得るのではないかとも思ひました。日本の海軍の水路部の手で唯今江中を測量して居らるゝやに聞きました。之によりて完全なる圖面が出来るだけでも、大變に舟運を増進せしめることゝ思ひます。尙將來松花江の水運を黑龍江まで進出させ度いと希望して居らるゝ方もありました。

哈爾濱より飛行機で奉天に來り、續いて撫順、大連と視察して、船で日本に歸りました。從來は滿洲を視察して哈爾濱位まで行けば餘程北に行つた様に思つて歸つて來られる方が多かつた様であります。今では哈爾濱位で歸つても駄目で、之れより以北、少なくとも齊々哈爾濱位まで行かねばならぬ様であります。と申しますのは、哈爾濱以南は殆んど開拓し盡されて居るので、是からの仕事は其以北に多いのであるからであります。齊々哈爾濱近も今では治安も相當に維持せられて、大した危険もない様に聞き及びましたから、どしどし北滿に御出掛すにな

る様に御薦め致します。

以上で私の講演を終わりますが、長時間御清聴を煩しましたことを御禮申し上げます。(拍手)

○眞田會長挨拶；一言御禮を申し上げます、滿洲と日本との關係が益々密接になりつゝある際木津君は港のお話やら色々お話下さつて又活動寫眞に依つて目からも事情を紹介して戴いて大變有益に感じました、一同に代りまして厚く御禮を申し上げます。(拍手)